



TITLE:

玉島通信

AUTHOR(S):

---

CITATION:

玉島通信. 天界 1931, 11(118): 155-156

ISSUE DATE:

1931-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161619>

RIGHT:

## 玉 島 通 信

この頃の天文學界はなかなか賑かですが、<sup>1</sup>「西部出張所」もそれにつれて次第に繁昌してゐます。

微光流星の廣島の長谷君はこの頃では1時間平均 50個位、どんなに速くとも6等級迄は捕へ得るといふ御上達ぶりで、これが全く肉眼觀測ですからおそろしいものです。天のいづれの方角にも同じやうに輻射點があるとは鹽見君の御説に一致しますが、願はくばこの調子で赤道以南の空が徹底的にしらべられたいものです。

長谷君の好敵手である大分の原田君は口径3cm、倍率3倍、視野15°といふ面白い小望遠鏡をつくられました。低倍率ですが7等級までは平氣といふ逸物で、視野の廣いことは同君も<sup>2</sup>「これは中村さんを除いて、流星用として作られた器械としてはこれが日本で一番始めであらうと思つて一人で威張つてゐます」<sup>3</sup>と言はれる位で、この鏡がどんな働きをするかは興味ある問題です。

黄道光觀測者も少しづつ多くなつて參ります。私もすでに120回の觀測をしましたからもう新米とも言へません。1927年1月以來 Himmels-Atlas を寫取つて100回以上の觀測をせられた龜井さんの御苦心を思へば、目下は専用星圖や觀測用紙が自由に得られるのは實に幸福のことで、殊に田舎にゐらつしやる會員諸君に御すゝめする次第です。觀測は決してむづかしいことではなく、私の手でうまく觀測をはじめた人も數人あります。有志の御方は御遠慮なく御申出で下さい、導きませう。G. Jones 氏が發見した<sup>4</sup>「月による黄道光」の問題や、對日照のくわしい觀測法などいづれ近く執筆したいと思つてゐます。

又、原田君はこの頃毎晩彗星さがしに御熱心です、この御熱心は確に近く<sup>5</sup>「原田彗星發見!!!」の一大快報を結果するであらうことを私達はよろこばしく存じます。序ながら天界第116號の山本先生の御文 p. 50. 13 行目の( )の中を先生の御許を得て次の通り訂正します——今年5月、原田參

太郎氏がシヴスマン彗星の獨立發見を致しました——

福岡の田中君は太陽寫眞にも興味を持たれ、<sup>1</sup>……金がかゝらずにうまく寫す方法を考案して時節柄特許でも取つて 同好會に寄附しやうかなど空想にふけてゐる次第です<sup>2</sup> は近來の吉報で大いに期待してゐます。

昨年 8 月倉敷の會合の時、天文學は理學部にあるよりもむしろ文學部にあるべきであるといふことになり、野尻さんが文部大臣になられると實現するであらうと冗談を言つた人がありますが、その野尻さんが私達の星の友になつて下さつたことは誠にうれしいことです。

一昨年 8 月天體觀測をはじめてから昨年末までの 星の友からの親書正に 280 通、以て天文同好會の一目的を達しました。(1931 年 1 月 1 日記)

岡山縣玉島町八幡 荒 木 健 兒

### うるはし!! ——空に赤色の帶!

1930 年 10 月 23 日 日没 17<sup>h</sup> 21<sup>m</sup>. 全曇にして、月 (月齡 0.4, 18<sup>h</sup> 05<sup>m</sup> 没), 及び金星を認めず。

17<sup>h</sup> 26<sup>m</sup>, 美しい夕燒の橋は、黃道に沿うて、子午線を越え東の地平線に達し、而も、東天は對日照の如く、Band よりも少し強く燒けてゐる。

28<sup>m</sup>, Band は東方から徐々に消えはじめる。西天の色も弱い。

29<sup>m</sup>, 全く消えてしまひ、且西天の赤色も殆んどなくなつた。

35<sup>m</sup>, 再び西天が色づき、旭光の如く南北に廣くかゝやいてゐた。

Band が出たが、色淡くして、漸く子午線を東に越え、直ちに消えた。東天は燒けてゐない。

40<sup>m</sup>, 夕燒全くやむ。

この現象は、黃道に永久的光帶の存在を説明することに、一暗示を與へるだらう。(淡翠)